



特集

1. 第3回合同調整委員会開催

- 1 合同調整委員会開催
- 2 昆虫学調査現地レポート
- 3 プロジェクト視察団報告



第3回JCC議事録を交わす岩井次長と
Dr. Thandar Lwin



第3回JCCの様子



JCC後の懇親会の様子



専門家より寄付された日本酒と升

2018年7月11日に第3回合同調整委員会 (JCC)がネーピードで開催されました。

保健スポーツ省からは疾病対策局次長である Dr. Thandar Lwinが代表として参加し、他 25名のカウンターパートが中央、州、地域から 参集しました。JICA事務所からは岩井次長、 市川所員、KThwe Aungさんが参加し、総勢 34名で執り行われました。

今回のJCCでは、通常の年次協議に加えて、 プロジェクトの運営基盤であるProject Design Matrix (PDM)の改訂も協議の対象となりました。プロジェクト形成時と比べてマラリアを取り巻く 状況が大きく変化したため、それに対応し、より 効果的な活動を行うことがPDM改訂の第一の 目的でした。

改定にあたっては事前にカウンターパート、 JICA本部、事務所、プロジェクトの4者で度重 なる協議を行いました。プロジェクト形成当初、 ミャンマーのマラリアは“排除”ではなくマラリアを公 衆衛生上問題とならないレベルまで下げる“抑 制”を目的としていました。しかし、2014年にミヤ ンマーで開かれ、安倍首相も出席した第9回東 アジアサミットにおいて、2030年までにアジア・大 洋州地域からマラリアを排除することが採択され ました。その政策にコミットすべく、マラリア抑制から 排除へと目標や活動がシフトされ、2017年には National Plan for Malaria Elimination が承認されました。この方向性に準拠し、多くの

パートナーの中でJICAプロジェクトの優位性を最 大限に発揮できる協力内容となりました。

JCCでは、PDM改訂の内容やプロジェクトの活 動及び今後の活動に関し、活発な意見交換が 行われ、行政やNGO/INGOの支援が届かない カヤー州とカレン州境へのプロジェクト支援要請 やマグウェ地域のプロジェクト対象地域の拡大に 向けた提案が挙げられ、今後の課題として検討 していく事になりました。

また、議長のDr.Thandar Lwinからは、長 年のマラリアを含むJICAの感染症対策への協 力について謝意が述べられました。議事録は JCC内で迅速にまとめられ、当日承認を得るこ とができました。また、2017年度に完成したミヤ ンマーに関連するマラリア研究のBibliographyも 関係者に配布されました。

JCC後の懇親会では、日本人専門家が提供 した各地域の日本酒を日本から持参した升で 楽しみました。升には蚊のロゴを施し、参加者全 員にプレゼントしました。日本の留学経験がある マラリアプログラム・マネージャーのDr. Aung Thiが升酒の飲み方を参加者に伝授し、普段 ではお酒を嗜むことのない女性カウンターパートも 一風変わった楽しいひと時を過ごしました。

2018年度もカウンターパートと共にマラリア排 除に向けて今までの蓄積を基に幅広く活動し、 活動成果を対象地以外でも拡充していきます。



Contact Address:
Malaria Control Office Compound,
Corner of BayintNaung St,
& BPI St, West Gyogone,
Insein Township, Yangon
Phone: +95 (0)1 3644212
E-Mail: min.rieko@gmail.com
(担当 : 川井)

2. 昆虫学調査報告



1 2017年5月から開始された昆虫学調査は12回を超え、蓄積された情報から媒介蚊の種・個体数の季節的変動が少しずつわかってきました。調査は、これまでの長年の経験からデザインされ、調査地はマラリア流行のポテンシャルが高い焼畑と多くの移動人口が流入するチーク植林地を選んでいきます。調査は、VBDCの昆虫学主任であったDaw Mar Mar Winと、2名の若手女性スタッフが季節を問わず猛暑の乾季から雨期の中、調査対象地域に赴きます。時には小川を超え、悪路を抜けて調査地に向かうこともあります（写真1）



2 6月の調査では、森林局の協力を得て4頭の象に乗り、調査地域に向かいました（写真2）



3 昆虫学調査では、昆虫の走光性を利用したライトトラップ（写真3）という照明誘導装置を主に使用しています。この装置にはバッテリーが必要であり、毎回の調査には多くの資材を持参します。そのため、調査準備から調査を実施するに当たり、現地の方々からの協力が欠かせません（写真4）。



4 持参したライトトラップを準備し、トラップを設置する家屋等に配布します。一集落が広範囲に位置するため、住民にライトトラップを取りに来てもらい、使用方法、設置場所、収集後の扱い方などを指導します（写真5）。一晩から二晩の収集を経て得られた昆虫を選別しますが、光に誘導さ

れるのは蚊だけではありません。数百にもおよぶ昆虫から媒介蚊を選別します（写真6）。対象地域でみられる蚊はおおよそ16種類。その一つ一つを肉眼で確認し、蚊の判別ができるDaw Mar Mar Winが種を特定し、標本にします。この細かい作業がライフラインの乏しい僻地で行われています。



5 1回の出張で約二地域を周り調査するため、1週間ほどの出張期間になります。ヤンゴンの都心と異なる環境の中で、スタッフたちは確かな情報を収集するために活動しています。

6 アシスタントの一人は得意の母語であるカレン語で現地カレン族集落において積極的にコミュニケーションを図り、社会的な情報収集にも徹しています。そして、フィールドで得られた情報は、プロジェクトに持ち帰り、中村専門家とスタッフによって情報分析が行われます。

7 このように、スタッフは多岐にわたる活動に従事しており、アクティブなミャンマー女性軍によってマラリア排除プロジェクトは支えられています。今年度もあと6回の調査が予定されています。

昆虫学調査から見えてきた状況

マラリア抑制計画では活動の主力は患者を発見して、迅速に治療することでした。しかし、排除計画では、発見・治療の強化に加えて、伝播をゼロにするためにはマラリアの媒介蚊の生態学的特性と人の行動パターンを的確に捉え、効果的な戦術を構築することが必要です。

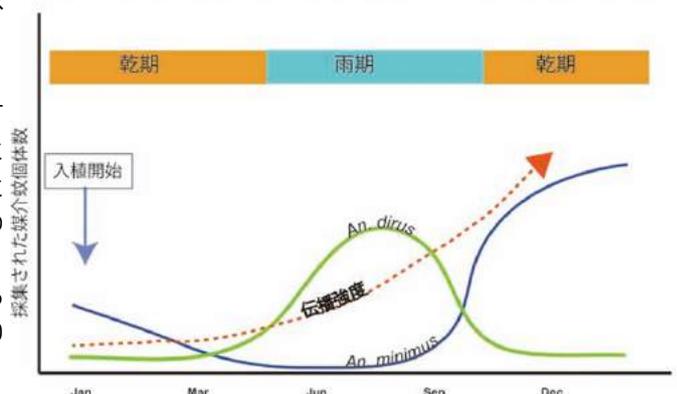
特にプロジェクト対象地であるBago山地では、チークの植林が積極的に行われており、植林作業のため多くの人が入植し、1年間を過ごしており、そこが伝播の温床となることが考えられます。入植後、媒介蚊の個体数がどのように変化するかを調べることにより、伝播の危険性をはかることができます。この目的で、プロジェクトでは継続的に媒介蚊の採集を実施してきました。図は、ライトトラップでの採集結果を模式化したもので、植林地でのミャンマーの最強の媒介蚊である*An. minimus*と*An. dirus*の個体数の変化を示したものです。入植後の個体数は両種とも少なく、雨期を迎えると森林内の水たまりを発生源とする*An. dirus*の個体数が増加し、他方*An. minimus*は減少します。

このことは*An. minimus*の発生源が小渓流で、雨期の間は水量・流速が増すため、幼虫が流されてしまい、結果として最終数が減少すると考えられます。雨期が後期から乾期となり、水量が安定してくると*An. minimus*が増加傾向となり、森林内の水たまりが少なくなると*An. dirus*は、減少していきます。結果として、雨期後半から乾期の初期にかけての時期が最も伝播強度が高まると考えられます。

現在マラリア発生がほとんどなくなったとは言え、この時期に外部からマラリア患者が入った場合には、突発流行が起こる可能性が高くなります。

排除に向けてマラリアの再流行を防ぐためには、このような状況を踏まえて再流行の予防策を講じていく必要があります。現在多くのパートナーがマラリア排除に関わっていますが、そのほとんどは新規戦術を開発するための技術的専門性を有しておらず、ガイドラインに従って活動を行っているのみです。プロジェクトは、唯一の技術協力パートナーとして、これまでに培った経験と専門性を背景に、VBDCとの共同活動を通じて、排除の中核となる国家プログラムの強化を行っています。

プランテーション入植後の降雨パターン、媒介蚊の増減、伝播強度の変化



3. ようこそ、マラリア排除プロジェクトへ！ プロジェクト視察報告



マラリアのプロジェクト事務所は都心から離れており、ダウンタウンからは車で1時間程かかります。首都移転前、外来患者を沢山受け入れていた施設内は、倉庫化してしまい、敷地内は草木が鬱蒼と茂っています。入り口には常に番犬の様な野良犬が数匹。このような環境の中、8月は二団体からプロジェクト視察依頼を受け、プロジェクト紹介を行う事ができました。

まず最初に訪問された福祉フォーラム・ジャパンのご一行は、日本で高齢者医療に携わる7名の専門の方々でした。途上国の医療にも関心があり、コミュニティで活動をする当プロジェクトに関心を抱いてくださいました。過密なスケジュールの中、中村専門家による濃厚な講義を聞かれ、蚊の飼育室見学や実際に顕微鏡を使いマラリアスライドを観察されるなど、充実した視察を組むことができました。

次に、国際救援看護論実習という目的で日本赤十字豊田看護大学3年生がプロジェクトを訪問くださいました。早朝バンコクを出発され、ヤンゴン到着後直ちにプロジェクト事務所に赴いてくださった10名の学生さんと引率の教授、講師の方が2時間ほどプロジェクトを視察されました。

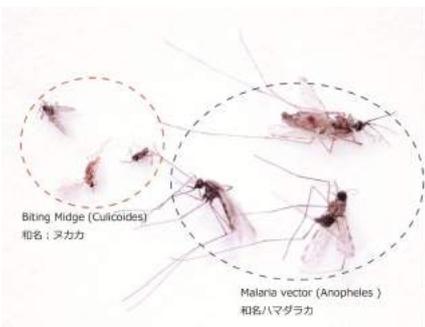
日本の看護教育では深く触れることのない熱帯医学、特にマラリアについて中村専門家が丁寧に解説しました。学生さんは熱心に講義に耳を傾け、また積極的に質問をされていました。更に自らすすんでマラリア迅速診断を体験するなど、講義を開催する側としても楽しい時間を過ごすことができました。中村専門家の話に続き、同じ赤十字出身者の川井業務調整員が自身が経験した国際協力の話と戦時中にビルマで活動した日赤従軍看護師の発表を行いました。学生さんと同じ年齢程の日赤看護師たちが激戦地において任務を全うすべく亡くなられていったことを想うと、きっとミャンマーも違った視点から見えてくることと思います。

視察団の受け入れを通し、プロジェクトではスタッフ一同がミャンマーらしいおもてなしを行いました。過密なスケジュールを有効に活用できるように昼食を準備したり、季節のフルーツを楽しんでもらいました。このような視察を通じて、我々プロジェクトも励ましや元気を頂けます。今後も様々な方々にプロジェクトを広く理解して頂けるよう、プロジェクト視察に積極的に対応してきたいと思っています。

マラリア小話

このコーナーではマラリア一筋30年の中村専門家から頂いたマラリア豆知識をお届けします。

ミャンマーの雨期には、いろいろな生き物の活動が活発になります。吸血して種をつないでいる生き物は蚊だけではなく、蛭やブユ（ブヨ、ブト）、アブなどがいますが、蚊などに慣れっこな山に住んでいる人たちでさえ、大いに嫌がるのは「ヌカカ」です。雨期の間に大発生し、蚊よりもはるかに小さく、室内では蚊帳の目は抜けてくるし、野外では多数のヌカカに吸血されている事すら気づきません。しかし、その痒さと刺されたあとの炎症は蚊の比ではなく、しかも長く続きます。私も裸になっての水浴び中にヌカカの集中攻撃を受け、川に飛び込んで首だけ出して難を避けた事もあります。蚊採集のためのライトトラップもこの時期には、微少なヌカカが大量に獲れ、ヌカカの山から蚊をほじくり出すような有様です。幸いミャンマーではヌカカが媒介する人の感染症は確認されていませんが、この虫はこの時期に食卓に上るカエルと同様、雨期の風物詩なのです。（記：中村 正聡）



編集後記

今年のJCCも和やかに終了し、ほっとしています。プロジェクトにはモットーが色々ありますが、その一つが「どうせやるなら、楽しくやろう！」です。そのため、今回のJCCでは、なぜか大量の升を持っていた中村チーフアドバイザーのご厚意で升が寄付されたため、私はヤンゴン郊外の格安印刷所に伺い、マラリア専門家がこよなく愛するハマダラカのデザインを升に施してきました。懇親会では女性軍も日本酒を嗜み、重い思いで一升瓶を日本から持参してよかった！と感じました。

また、視察に来られた方々から多くの励ましとパワーを頂きました。日赤の学生さんを見送った後、中村専門家と「若いっていいね～」の繰り返しでした。

今年度も既に半年が過ぎ、これからいよいよ忙しい乾季に突入します。プロジェクトの成果を広げていくため、沢山の活動が予定されていますので、次号では最新の活動状況をお伝えできるよう編集をがんばりたいと思います。

編集担当：川井 理恵子

JICA技術協力HP:

<https://www.jica.go.jp/project/myanmar/024/index.html>

ODA見える化サイト:

<https://www.jica.go.jp/oda/project/1500474/index.html>

